

# Sabbrabells

## THE LEGEND OF SABBRABELLS

All text interview and review by Shun Ajiki

### Introduction

初めにお断りしておく、この特集は決して SABBRABELLS が再結成するとか復活するとかそのようなものでは決してない。あくまでその伝説のバンドの真実の姿を今に伝えたいという趣旨の企画である。

1980年代のジャパンメタルシーンの中でひととき個性的でそして今や伝説の存在となつてその名を語り継がれるバンド SABBRABELLS。昨年の12月にキングレコードより彼らのメジャーデビュー後の作品である「SAILING ON THE REVENGE」「ONE NIGHT MAGIC」そして今回初 CD 化となつた「LIVE!!」の3タイトルがリマスター再発された。かつてこの伝説のバンドを観たことのある人はまだしも、今回のこの再発で初めてこのバンドの音に触れた人は果たしてどのような印象を持ったのだろうか？「埼玉の BLACK SABBATH」「サタニックメタルのカリスマ」など SABBRABELLS を形容する言葉はそんなものが多いように思われるが、この言葉からくる幻のバンドに対する想像と実際に今回初めてその音に触れた時には少なからず何らかのギャップが生じたのではないかと思われる。SABBRABELLS は「埼玉の BLACK SABBATH」であり続けなかったのか？伝説のサタニックバンドであった SABBRABELLS のライブを体験している幸運な人間の一人としてそのバンドの真実の姿を今の時代に伝えたいと思ひ、その作品群の紹介、私の記憶の中の SABBRABELLS、そしてその実像を明確にするため、今は音楽業界から退いてしまつているこのバンドの創始者であり、Mr.SABBRABELLS である本人、高橋 喜一氏にコンタクトをとり本人の口からこの伝説のバンドの歴史について語ってもらつた。高橋氏は今はまったく別の仕事をしており非常に多忙の中無理にお願いをし、当初は CD の再発直後のインタビュー予定であつたが少々遅れてなんとか今号に間に合うようにその興味深いお話を聞くことが出来た。

### SABBRABELLS History

1980年の夏に高橋喜一 (Vo) を中心として宮尾敬一 (B)、佐野博之 (G) を中心として結成されたバンド REDING がこの SABBRABELLS の前身バンドである。1年くらいの間地元埼玉を主戦場として活動し、G に松川純一郎が加入したあたりでバンド名 SABBRABELLS に改名。東京に進出し ANTHEM.、MURBAS らと都内のライブハウスで積極的なライブ活動を繰り返し多くのファンを獲得。特にこの時期の東京のインディーメタルバンドの主戦場であつた神楽坂のエクスペディションでのパッケージライブ“Heavy Metal Force”では多くのキッズを動員しサタニックメタルという独特の個性と高橋喜一の強烈な存在感の放つ毒によって多くのファンというよりは信者を生み出す。

1983年の6月に彼らはこのエクスペディションを使って8トラックのレコーディング機材を使用しアルバム製作に入る。約1ヶ月を費やし制作されアルバムは「SABBRABELLS」と題されエクスペディションレーベルの発足第1弾作品として83年9月にリリースされている。この作品が日本メタル史上に残る傑作であると同時に最もレアアイテムとして語られるあのアルバムある。このアルバムは発売後数ヶ月でソールドアウトになり関西方面にもツアーを敢行しバンドは完全に軌道に乗っていた。

翌84年にエクスペディションレーベルからリリースされるオムニバスアルバム「HEAVY METAL FORCE」に“ルルドの泉”を収録。この間ドラムが石橋茂雄に替わっている。(リリースは84年の初夏)このあたりからバンドに変化が見えはじめる。従来のサタニックメタルのおどろおどろしく重い世界観からシャープな部分を強調するようなサウンド形態へと移行しようとしていた。従来のサタニックなイメージが好きだったファンにとっては少々戸惑うような変化であつたが時代に流れには合つていたようにも思える。バンドはよりスマートでドラマティックなヘヴィメタルサウンドを追求し85年10月にミニアルバム「DOG FIGHT」を制作。セールスも好調でバンドの変化は新しいファン層の獲得に成功し、そしてついに85年の冬にキングレコードとのメジャーディールを獲得する。同年末の目黒の“All Night Metal Party”に出演し(この模様はオムニバスライブの形でLPがリリースされる)86年に2月に新宿レイドでメジャーデビュー決定報告ライブを行い400人もキッズを動員する。86年6月アルバム「SAILING ON THE REVENGE」が発表される。半年間で130本の過酷なツアーを敢行し、同年9月27日に行われたバンド初のワンマンライブは埼玉会館で行われライブレコーディングされ、ミニアルバムとして発表された(ビデオも同タイトルでリリース)。

翌87年には2ndアルバム「ONE NIGHT MAGIC」の制作に入る。アルバム発売の前にバンドとしては唯一の7インチシングル「DOG FIGHT」(リレコーディングされている)を先行でリリース、アルバム「ONE NIGHT MAGIC」が発売されたのは87年の4月5日である。LP、CD、カセットの3種類のフォーマットで発売されておりCDにはLPには未収録だったインディーズ時代からプレイされていた名曲“ルルドの泉”が収録されている。その後でメンバー間の目指す音楽性に違いが生じ SABBRABELLS は解散する。しかしメンバーを一新した SABBRABELLS は再び始動するものの、結局音源を残すことなくライブ活動に終始し、第2期 SABBRABELLS の活動も終了する。

# SABBRABELLS 高橋喜一 Interview

## REDING 時代

**Q.ではまず高橋さんのバンドのスタートあたりから教えてもらえますか？**

高橋:最初は Bass 弾いてたんだよね。SABBRABELLS のずっと前に RED WARRIORS のギターの小暮(SHAKE)とバンドやって、ちゃんとした事務所に所属して派手にやってたよ。AEROMSMITH と STONES を合わせたみたいなバンドだったね。高校卒業する時に SHAKE に誘われてバンドやり始めなければ違う道に行ってたと思うな。地元の浦和でやってただけで、浦和ってけっこうロック人口多くて恵まれてたね。“ONE STEP COMPANY”っていう音楽団体を俺と SHAKE でやってたくらいだから。主にライブイベントをやって、野外とかでもやったな。

**Q.SHAKE さんとのバンド活動が始動しなければ SABBRABELLS の誕生もなかったというわけですね。**

高橋:うん、まあそういう感じかな。で、SHAKE とやってたバンドをやめるということは一応事務所に所属しててプロだったわけだから、それを捨ててまっさらのアマチュアに戻るって事になるわけだから、でも俺はもっとアンプのヴォリューム全開の音が出せるバンドがやりたかった。ヴォーカルも思いっきりシャウトする感じがやりたくって、でもその時は自分がヴォーカルをやるなんて思ってなかったし。

**Q.Bass からヴォーカルに変わったのっていつ位なんですか？**

高橋:そのストレートっていうバンドをやっている時に音楽性合わないって思ってた裏でハードロックをやり始めてたんですよ。宮尾君とかと最初は REDING って名前付けて(イギリスの REDING FES からの名前)ドラムを見つけて、で、ヒロちゃん(佐野博之)、やっぱヒロちゃんは核なんですよ。生き様から何からロックな人だから。松川君のように勉強してテクニックを吸収してっていうギタリストではないから。どっちかっていうと Paul Kossoff みたいな一音入魂みたいなギターで。何回かメンバーチェンジもあって結局ドラムに関口君が入って形になってきましたね。とにかくメジャーになるなんていう気は一切なく始めたのがこの REDING。自分達の作ったもので日本中のライブハウスを回りたいよねって純粋に思ってただけ。で、自分はその前はプロでやってましたからコネでライブハウスも出れたんだけど、そういうのはイヤで学園祭とか楽器屋のイベントとかばっかりに出て REDING ってバンドは 1 年くらいを過ごしましたね。

**Q.REDING というバンドはどんな音だったんですか？**

高橋:けっこう重かったですね。プログレも混じりサバスも混じりって感じで。KING CRIMSON のヘヴィな部分もあったと思うな。でも、そこで G ジャン着てヘッドバンキングしてたのが YELLOW MONKEY の広瀬とか、でその辺の連中が作ったバンドが MURBAS。その辺の連中と浦和の野外で大きなライブをやって、そこで自分の新しいバンド REDING をお披露目して、それからデモテープを録って EXPLOSION のドアを叩いた。

## “呪文の鐘” ~SABBRABELLS 誕生

**Q.そのあたりが SABBRABELLS のスタートなんですか？**

そこに居た藤沢社長が気に入ってくれて、ちょうど十二単とか ANTHEM とかもいて海外でやってるヘヴィメタルに合わせた盛り上げていくつもりだから一緒にやらないかって事で、名前を変えてスタート。SABBRABELLS ってのは BLACK SABBATH の “Sabba Katabbla” と AC/DC の “Hell’s Bells” をくっつけた “呪文の鐘” っていう意味なんですよ。名前変えて初めてライブをやったのが新宿の ACB です。一緒に出たのは ANTHEM、十二単。REDING でマーシャルを 125V で鳴らして 1 年間さんざん暴れて、そのスタートは自分たちが掴んだって感じてましたね。EXPLOSION 時代は長かったですよね。ライブやってまたライブやっての繰り返しで、藤沢社長が積極的にホールを押さえてくれて “Heavy Metal Force” っていう名のメタルイベントはけっこうやりましたね。(因みに当時関東ではこの EXPLOSION というライブハウス主催の “Heavy Metal Force” というカップリングライブイベントが最もクオリティも高く人気があった。今でいうと “漢企画” なんかに近いかもしれない。いろんなバンドがいてバンド同士の盛り上がりがあって、それが自分達の音楽性を上げていく緊迫感になってましたね。見に来たキッズはもう男も女も大ヘッドバン大会で大汗かいて盛り上がってくれて。そういえばその時もまだ俺らはロンドンブーツにベル

ポトムだったからさすがに ANTHEM の柴田さんに「キーチ、もうカッコもヘヴィメタルにしない？さすがにそのロンドンブーツはもうやばいんじゃない？」なんて言われて(笑)。柴田さんとはホントにいろんな話をしましたね。俺はもし俺が SABBRABELLS を止めても柴田さんにはメタルで成功して欲しいなってずっと思ってたね。

**Q. 来週復活ライブが渋谷であるんですよ。まだ人気ありますよ。ANTHEM は。凄いです。(インタビューは 10 月 8 日)**

高橋:その凄さってのは柴田さんがやり続けたっていう持続なんですよ。ブームとかに左右されないで自分のスタイルを持続されるっていうのは凄く大変なことですよ。柴田さんって本当に凄い人ですよ。それに比べると SABBRABELLS っていうのは高校時代の仲間がそのままいっちゃったって雰囲気があるんで(笑)。

## インディーズ時代~SABBRABELLS の世界観

**Q. REDING から SABBRABELLS に名前を変えて、ロンドンブーツを止めて、メタルの雰囲気を出してきたと同時に “悪魔的、サタニック” なイメージを出してきてますよね。あれは誰のアイデアでそうなったものなんですか？**

高橋:例えばあのマントは REDING 時から使ってるんですよ。俺が歌い始めた最初から。光の部分と影の部分というのをメンバーと話合ってた。光の部分って恋愛のことだったり、いい悪いは別にして世間一般の人が聴く音楽であって、俺たちは影の部分で歌ってたいと思ってダークネス、重いのがイイからヘヴィ、“DARKNESS & HEAVY REDING”。それがそのまま SABBRABELLS になっていったわけです。悪魔的とか黒魔術的とかで言えば俺にもメンバーにもそういうものに凄く傾倒してた時期があって、それに完全にハマっちゃった時期もありました。ローソク立てて一日中 BLACK SABBATH 聴いてたりしてそういう方向にいちゃって、まあ僕は友人の関係でトワイライトゾーンとかムーとかの取材に行ってたことがあってそういう現象とか書物の話もたくさん聞けたんで。それを自分が思う世界に比喻していった。光あるところには影がある。影は絶対付きものなんだ。ダークはずっと暗くないといけな。まあそういう事でイメージ的にそっちの方向でやっていこうって曲名とかもそのイメージで決めるようになっていったんですよ。サタニックっていう言葉は全然知らなくて自分達では「ダークネス、ダークネス」って言ってましたね。

例えば “破壊” これが一番最初に出来た曲なんだけどリズムもあんな感じだし(ミドルテンポのヘヴィなリズム)、あれやると原点に戻る感じでした。だから今聴くと時代錯誤も甚だしい曲もありますけど、それは僕たちがヘヴィメタルを聴いて育ってない、ハードロックを聴いて育ってる、やりたい音をやったらハードロックだったっていう事なんですよ。何が違うんだろうって分析した結果、展開が違う、曲中の展開が違う、場面の展開が遅いんですよ。昔のハードロックって音が混じり合っている、ソロは弾きたいだけ弾いていい、それがハードロックだった。それをカチカチと CPU のように割り切っていくのがメタル、それが加速してスピードを付けて後にスラッシュになっていくんだけど必ず向こうの音楽ってバックボーンがあるんですよ。クリープショウとかのホラーの映像見てた奴らがそれに合う音を探したらそれは SLAYER だった。それがゲゲゲの鬼太郎ではメタルにはならない。まあそこががんばってる人間椅子なんかもあるけど。場面の展開、曲のテンポそれは日本独特のものになると思う。このグルーヴ感では白人はのらないだろうなって。タイム感が違うんですよ。

**Q. 関西のバンドばかりが東京にくるってどういう感じでしたか？**

高橋:う〜ん、逆にね、関西で驚かれたよ。「東京から来たの？」みたいな(笑)。最初はキャンディホールで EARTH SHAKER とだったかな。びっくりされましたよ。いろんな噂だけ最初にいちゃったりして。まあ夢中になっていろんな事やってると変な事も起こりますよ。“Dog Fight” 録る時も何か起こるんじゃないかなって言ってたら着く前にそのビルのテッペンから人が落ちてきたりとか。ホントですよ。トワイライトゾーンにも載ったりしましたね。「呪われたバンド」なんてね。それが雑誌のった最初でしたから。(笑)

**Q. 世間的にはそういうイメージで見られてましたよね。**

高橋:そうですね。自分たちも意識することなくそうなりましたから。

**Q. インディーズの1stの事を教えて下さい。より本来の姿に近いというか、一番ダークな感じがします。**

高橋:そうですね、あれはもう逆に言えばそれだけの事をする手段がないんですよ。マイクだって8本しかないし、これしかないからこうするしかない状況なんです。みんなで考えて試行錯誤して懸命に録りましたよ。これはせーのでバックを一気に録ってるから、よりライブの感覚に近いですよ。たまに若い奴が俺を驚かそうとしてカーステでいきなりかけたりするけど、「止める、事故るから」なんてね。(笑)

**Q. でもあの1stメチャメチャ好きですよ。未だによく聴きますよ。**

高橋:やっぱジャケットにしても宮尾さん(Bass)の拘りがあって、今ではかなり有名になってるイラストレーターの人で宮尾さんの友達が全部手描きで描いてくれたんですよ。宮尾さんはデザインの学校行ってたんで、今も個人でグラフィックデザインの仕事やってますけど。その友人が全部手描きでやってくれたんですよ。あの1stと「DOG FIGHT」は全部手描きです。「DOG FIGHT」はメッサーシュミットの cockpit をそのまま写して、操縦桿を逆さ十字架にしてるんです。両方もかなり入れ込んで時間をかけて描いてもらってましたね。「DOG FIGHT」はメタルバンドとしては珍しくシングルも出てましたね。



**Q. なんであの曲のシングルを出すって話になったんですか？**

高橋:レコード会社からシングル出せばラジオでかかるよって言われて。シングルがないからラジオでかからないんだって。まあ俺たちはそんなのどうでもよかったんだけど。で「Dog Fight」でいこうってことになって。でも「Dog Fight」って言えばやっぱりホントにゼロ戦乗ってた人の気持ちを表現したいって思って靖国神社とか行っているいろいろ見せてもらってジャケットをデザインしてもらった。だから俺はそういうのを戦争も体験してないくせにそれを商品に使いやがって、そう言う奴がいても別に構わない。でもそうじゃない、そういうことでもない思い出さないだろうと、たつちちょっと前に終わったことをまったく思い出さないだろう。そうじゃない。これが今こそ俺たちが忘れずに、何かそこから学びとったり感じなければいけないので、忘れようとして平和だ平和だって言うってけどホントに平和かかって、多分平和じゃないよ。違う方向に向かっているよっていう一つの警告ですよ。

**Q. それで「Dog Fight」がシングルになったんです。**

高橋:そうですね。だって今こうしてる間にもどっかでミサイル撃ってるわけですよ。これ平和なんかじゃないですよ。まあ SABBRABELLS は偏屈なところはあったけどふた開けてみると意外と Rock'n Roll バンドだったと思う。ANTHEM が BEATLES だったら俺たちは STONES なんですよ。BEATLES は好き。でもまあそこまで優等生になれないんだよね(笑)。そんな感じがあった。だからレコード会社にはよく怒られました。仕事しないって言う。ある時仙台だったかな、ライブの後レコード会社から電話かかってきて「キーチ、デヴィルマンやってくれない？」って、ビデオかゲームソフトか忘れたけどその主題歌をやってくれないかっていう話だったんですよ。で話合って British Heavy Metal やってる俺たちにはブツ倒れるくらいヘッドバンキングしてくれてるキッズがいてそれで俺たちにデヴィルマンやれるかって、いくら金くれるか知らないけど、できない。止めようって。だから仕事しないって言われて。でも ANTHEM は「XANADU」とかやるでしょ。俺たちはやらないんですよ。とてもじゃないけど俺たち以外のことは出来ないんですよ。

よ。ANTHEM はそれやってもそこに真っ向から自分達ぶつけてやるっていう土壌を柴田さんが作ってるからいいんですよ。俺たちはそうじゃないから。柴田さんはそれをこなせるから。俺たちは出来ないから。やっても「デヴィルマン」とか言ってお茶濁して終わったと思う。半音ずらして暗いでしょ、なんて言って(笑)。

#### SABBRABELLS 流の作曲方法

**Q. きっとほかのバンドの作曲のプロセスとは違うんじゃないかなって思ってたんですよ。こういう曲が出来てじゃあ歌詞をつけてっていうのはあんな世界は出来ないって思ってた。イメージがあってその曲のなかで、この場面でこのメロディみたいなそういう感じのなかで。**

高橋:そうですね。例えばね曲作るとき詞、イメージからできるでしょ。「夜歩いていると後ろから誰かがついて来る。段々近づいてくる。なんか気持ち悪いから振り向かずには逃げる。段々早足になる、でもまだついて来る。心臓が緊迫して殺気を感じて逃げ出す。そして走り出したら行き止まりだった。っていう場面を音で出してみようか」って言う感じで曲を作るんです。ドラムはどうする？最初は重く遅いテンポで、段々速くなって最後にパーンって行き止まりで。そういうのを練っていくうちに曲になってくんですよ。だから作り方はほかのバンドとはちょっと違ったと思います。いきなり話(イメージ)から入るから。

昔、太平洋戦争で特攻隊で次の日に死んでしまう飛行機乗りの人が、そういう人達にも親がいて、愛とか恋とかの話もあったんだろうけど、そういうのを一切なく飛んでいってしまう。それは資本主義の欲しいものがあれば獲っていいという産業革命の一番激しい時代の歯車に飲み込まれていってしまった人々っていうのが、そういうものを一切無視されて兵隊として飛んでいったわけじゃないですか。でもその飛んで行った瞬間に思い出すのは、メッサーシュミットに乗った人の手記とかを読むと、その時に思い出すのは御国万歳ではなく、親とか恋人のことだと、それをフツと思った瞬間には自分の翼は燃えている。それが、そんな思いはぐるぐる回って曲ができるんですよ。すぐに。「Dog Fight」なんかほんとに5分で出来ました。俺が松川君に「これから飛び立つところ。キーンって、わかる？じゃあそれをギターでやってみて、いい？次は攻撃にいくとこグリーンって一機づついくよ。そこ思い浮かべて、そこギターでやってみて。」それで松川君は何日かかかってやってくる。あの音は本当に飛行機の音なんですよ。フロイトローズ使って。で、そこからツイードって広がり持たせたい。そんな感じでやりました。曲ありきで詞をのせるっていうのは後半で何曲もあったけど、基本的にはあまりそのやり方ではないんですよ。だから僕としてはその説明がメンバーにわかって貰えないと曲はやりたくなかった。自分なりに解釈をしてもらってもいいし、それが必ずしも僕のイメージと違っててもいいんですよ。

バンドやってる若い奴によく言うのは「ヴォーカルは何言ってるの？例えばバカヤローって言いたいんだしたら Bass もドラムもギターもバカヤローって言ってないとお客さん見てバンドがバカヤローって言ってないよ。わかんないよ。自分のギターの手元見て音出してっていうんじゃないよ。心の中からのバカヤローがギターっていう道具を伝わって、ギターの音に変わってバカヤローってなるような。それほどメンタルな部分で曲ってやるべきじゃないの。」ヴォーカルがすごく悲しい歌を歌って、ギターはそれにどう答えるか、そこまで入り込んで曲やってくるバンドって少ないよね。もっと追求していいもんだと思いますよ。8 ビートにはのりにくいんですよ。確かに歌いにくいけど出来ないことじゃない。日本語だろうが英語だろうが一番大事なものはその曲に詞も演奏もすべてがマッチしてるかってことで、そこが SABBRABELLS ってバンドはほかのバンドと違ってやけに固執してやっていた。売れる売れないは別にして俺たちがそうやりたかった。

**Q. 僕は「東縛」って曲が、詞がものすごく好きなんです。サタニックではなくシニカルな感じでしたよね。**

高橋:あれなんかメタルの歌詞じゃないですよ。(笑)若い時期のどうにもならない思いですね。部屋の中で圧迫されて、イメージってものに捕らわれなく今の気持ちを書いてみようって思って書いた詞ですね。メンバーもあれをやるよグツとくるって言ってましたね。やっぱみんな思うところ、場面がそれぞれにあったんでしょね。

**Q. SABBRABELLS って伝説が一人歩きしてるところがあると思うんですよ。最近になって CD も再発されて多くの SABBRABELLS を知らない世代がその音に触れることができたと思うんですが、聴いた感じは聞いていた伝説とギャップがあったんじゃないかなって思うんですよ。サタニックとか悪魔的とかそういう世界観、イメージ、その辺について**

### はどう思います？

高橋:結局サタニックというよりSABBRABELLSはダークな、光と影だったから影、影の一部分なんです。悪魔の世界とか、悪魔がロックやってたらおもしろいじゃないかとかそういうことを考えてたこともあるけど、でもそれをも含んでしまう大きな影の部分の中にあっただけです。例えば“Running My Way”あれなんかもロッカーって夜うろうろして、雨の中傘もささずにくるんで濡れになって歩き回ってるわけですよ。それでもただ「俺は俺の道を行ってるぜっ」という歌だから。そんな事がパッと思い浮かんで曲を書くんですよ。とても光の部分ではないですよ。詞的には。そんな感じで曲を書いているから悪魔じゃなきゃいけない、サタニックじゃなきゃいけないっていう枠の中で本気で歌わなきゃいけないっていうとどうしてもいろんなものが“作り”になっていっちゃう。それ無理なんだよ。どうしてもイメージ的にはそういう雰囲気は出してたけども、KISS が一時期ノーメイクになっちゃったように SABBRABELLS も変わっていったね。本当はさジャンルとかカテゴリーとか抜きにして「こんなに楽しいんだぜ」って世界に行きたかったってのが本音かな。

### メジャーデビュー後の SABBRABELLS

Q. キングからメジャーデビューするあたりではまた違ったイメージになろうとしてましたよね。「ドラマティックヘヴィメタル」って広告のトップに出て驚いた記憶があります。

高橋:そうですね。カリスマ性がなくなっちゃって散々言われましたよ。でもね、カリスマ性よりも何よりもみんなと一緒に踊りたかった、暴れたかったっていうのが一番で、それにはノーギミックでいるのが一番だし、それが媚びてるように見えてたかもしれない。でもいずれ AC/DC みたいなハードな Rock'n Roll バンドになったとしてもそれが本望だみたいなところがあったから。JUDAS PRIEST や BLACK SABBATH みたいにバーミンガムで金属音きいて育ったっていうような強いバックボーンを持ってないのでやっぱりスタイルでやってるとこはありましたよ。レコーディングでもいろんな機械があっというんな人がそれぞれいてよくやってくれる。その中で自分を表現するのは難しいですよ。あと各パートを同時に録ってないから。個別に録るでしょ。俺から言わせるとライブからどンドン離れた状態で個人個人がレコードにしちゃってるとい感じなんだ。

Q. キッズのためにみたいな、キッズのためのバンドっていうような言われ方もしてましたよね

高橋:俺たちも客のパワーに吞まれてましたよ。それでやってる方も楽しかったし。

Q. ではあまりレコード会社から強要されてスタイルを変えてという事ではなかったんですね。

高橋:俺たちには誰も付いてなかったの、協力してくれた人はいたけど、音決めるのも何決めるのも全部自分達でやりましたから。レコーディングスタジオにいるのは俺たちだけでしたから。音がいいとか悪いとかはあと思っていますけど、自分達で全部やっていうそういう達成感があって、そこも他のバンドとは違ったかな。あんまりステイタスみたいなものは欲しくなかったから。ヒロちゃんがそうだったから。彼はある種影武者でしたから。一音入魂って言ったら一音しか弾かなかったり、音がいい場所見つけてそれがアンプの後ろだったら鹿鳴館でそこから出てこなかったりして(笑)、もう大変でしたよ。両方ともそんなギターだったら SABBRABELLS は終わってましたね。(大笑)松川君とか宮尾君はどっかクールでしっかり弾いてくれたから何とかなりましたね。

Q. そうでしたかね。(笑)いつも松川さんってしっかり弾いてましたよね。逆に佐野さんって巧くないんじゃないかなって思っていました。(笑)

高橋:そうそうヒロちゃんのギターってね一音入魂で巧きさんに関係ないっていうギターでした。弾かせるとヒロちゃんも凄いな。実は。彼がいなかったら俺もロックやってないですよ。

Q. 僕なんかから見ると松川さんがリードギタリストって印象だったんですよ。でも“ルルドの泉”のソロとかは佐野さんが弾いてましたよね。どしてだろって思っていましたよ。

高橋:あれはね、何故かっていうとあのシチュエーションは組み立てて弾くんじゃなくて本当に内面から出てくるもの、それを音にしていくような感じじゃないとダメなんです。で、これはヒロちゃんだねってことになってましたね。やっぱあの独特な毎回違うトーンはヒロちゃんの味なんです。10の音だったなら一音入魂したほうが響くよ、伝わるよ、ギターキッズに凄いて言われるんじゃないってロック好きなヤツに届くギターを弾くんだって言ってましたね。

SABBRABELLS はホントに数多くライブやりましたね。何回かは地方

でスパークできたような時もありましたね。本当に遠くで稲妻が白く光ったっていう震えが止まらなかった時がありましたね。一人じゃなくて全員の演奏がピタッと合ってる瞬間スパークするんですよ。神戸のチキンジョージってところでシャウトした時あの暗い会場が真っ白になった時があってあれは忘れられないですね。シンバルに頭ぶつけて血だらけのままアンコールに出て行って余計お客さん盛り上がったなんてこともあったね。プロレスじゃないってのに(笑)。ライブ終わるごとにマラソン大会の後みたいでしたよ。それはメジャーに行った後も変わらなかったですね。まあ SABBRABELLS は高校時代のハードロック好きが集まってオリジナル作って日本中回っちゃったって感じで、たいした偉業なんて何もしてないですよ。



Q. 「ONE NIGHT MAGIC」はどうですか？その時はすでにかなりシャープな感じになってたと思いますが？

高橋:すぐず〜っと長い道を途中でいろんなことがありながらも歩いていて、その横に白い壁がず〜とあるんだけどそこを行けばいつか何か見えるような、あれはそんな詞なんだけど、「一夜で、目に見えない音ってのがマジックだとすればそれで変わる瞬間もあるぜ」という。世の中目に見えるものが多いじゃないですか。目からくる刺激って強いんですよ。雑誌、TV 含めて。でも音ってのは目に見えないものでルックスとかそんな関係なくて、その目に見えないもので心が悲しくなったり、動くってことがある種のマジックなわけで、目に見えないもので泣いたり、笑ったり、怒ったりできる、一緒に暴れたりするとかそういう目に見えないものはマジックだよっていうのがあの「One Night Magic」なんです。ライブだってこの目に見えない音が相手に伝わってなければただ突っ立てるだけだから、だからこれ目に見えないものをオモチャに皆で遊んでるんだ、凄いな、これって。ラジオから聴いてるのだから下手したらどんな顔してるかわからないわけだから。でも感動したりするわけだから。だから耳に残る、どっかの店でハツとする曲が流れてて心奪われたり、そんな瞬間がワンナイトマジックなんだ。

Q. 「ONE NIGHT MAGIC」が発売された当時の CD に“ルルドの泉”が付いてた(CD のみのボーナストラック)と思いますがあれはいつ録音されたものなんですか？

高橋:あれは昔の録音じゃないです。

Q. そうですよ。昔の(Heavy Metal Force 1 に収録)方が1分くらい長いんですよ。

高橋:昔の俺たちってレコードとか CD ってものを全然考えてないんですよ。驚くほど考えてない(笑)出さなきゃ出さないでずっといいと思ってたから。だからレコード作るっていつもその中に曲が全部入ろうが入り切らなからうがそんなのどうでも良かったわけですよ。

Q. 同時に録音して入り切らなかったということではないんですよね？

高橋:そうですね。まあレコード会社から CD の方になんかプレゼント付けないかって言われて。で、“ルルドの泉”でもいれようかって話になって。でも今だから言うけどあの“ルルドの泉”はちょっと入り込めてないかな。あの1枚目のインディーズのって完全になり切りがすごい。で、音がいいとか悪いとかってのは別に自分たちで試行錯誤して音を作ってたって感じだったけど、メジャーになったからは音も録り方も決まってこっちはそのやり方に入っていくって感じだったから。何もわかってなくて。スタジオのすごい設備の中で聴いて「俺たちってスグが一なあ」って思って CD をテープに落としてカーステで聴いてびっくりしたいな(笑)。「なんか全然音出たねー」って感じた時もあった。でも、音がよく出ない CD を出してそれで何か言われても何も別に気にならなかった。だってライブが主体だから。ライブやってればみんな忘れてた

ね(笑)。

**Q. あんまり音源に対してのこだわりってなかったんですか？**

高橋:そうなんです。例えば「なんかこの写真ブサイクに写ってんなあ。でも本当はカッコいいんだぜ」みたいな。そりゃ一懸命は作りましたよ。売るもんだしね。聴いてもらうもんだから。でもそのすべてを自分達が、いたらない自分達がやってるわけじゃないですか。だからライブでやれてればいいみたいな、まあそういうことはアバウトだったかな。確かにキレイに録れてるけど、録る人も頑張ってくれたけど本来のマーシャルの音は録れてないですよ。

#### キング時代の再発CDについて

**Q. 自分では SABBREBELLS の CD とかは今は聴かないんですか？**

高橋:さすがに聴かないですね。音が良くなったなんて話を聞きましたけど。

**Q. これがその CD ですよ。「LIVE」も遂に CD 化されたんですよ。**

高橋:へえ、ホントだ。(まったくこの再発の CD を初めて見るとのことでした)これは知らなかった。“Sailing on the revenge”はヒロさんが拘って作った曲でリフにギター2本重ねてきてハモってるような感じであのリフは俺も好きだったな。松川君もイ曲いっぱい書いてくれたけどその時ハマってる人の影響が出てたね。Jake E Lee とかね。“Moon Struck”なんかそうだね。まあ衣装みれば良かったと思うけど。

**Q. “Stop the Motion”って個人的にはちょっと意外な感じにする曲なんですけど。**

高橋:これはけっこう古い曲なんです。もう REDING の時にはあったかもしれない。ライブではちょっと色が違うっていうんでやってなかったけど。新しく作ったのはこの“死神の涙”、これってスパイ衛星なんですよ。なんでも見られてるっていう。軍事で使われるカーナビってすごいでしょ。広島でチャリティのコンサート出させてもらった時、車椅子で見に来てた被爆者の人たちにものすごく拍手してもらえてその時にまだ全然広島終わってないって思って。松川君と衝撃 受けちゃって。俺たちって見るようで何も見てないって思った。視野が狭い。いつか自分がその核とかの事をお客さんにはわからなくてもいいから、これ歌ってるときはその時にその思いを忘れてないっていうインシヤルになる曲が欲しかった。それが“死神の涙”なんですよ。この曲はもっと練ってテンポも替えてプレイクさせようと思ってた曲です。確か英語の先生もつけてもらって英語でも歌おうと思って練習しましたね。

**Q. このキングからでた3枚のレコードのジャケットって何か意味するストーリーがあるんですか？**

高橋:これはね、俺たちが辿り着いた地球ってなんて荒れ果てるんだらうって言う意味なんですよ。(「SAILING ON THE REVENGE」のこと)ここの紫の月の回りに白があるでしょ。でもこれでもうダメなんですよ。俺のイメージしてたのっていうのは暗い空にぼんやり紫の月なんです。それがちょっとそこまでイラストレーターの人に伝わらないうのがありましたね。これ(「ONE NIGHT MAGIC」のジャケ)だったすごい宇宙をイメージしてスタジアムの中に俺たちが舞い降りてくるっていう感じで言ったらこうなっちゃったんだけど。俺はスタジアムを描いてくれては言っていないんですよ。この男の子も(「LIVE」のジャケ)ホントはこんなにキレイじゃなくて、もっと日本男児で長髪にしたんだけど髪を切られてしまっているっていう顔にして欲しかったんだよね。

**Q. その辺って海外を意識したりしたんですか？**

高橋:そういうのもあったね。1枚目なんかけっこうNYで売れたりしたらいいし、一度スイスの国営放送が鹿鳴館に来て片道だからスイスに来てライブやらないかっていう話なんかもあったね。なんかコアなどが受けたように思える。

**Q. 80年代後半になってもう HELLOWEEN とかのジャーマンメタルとかも出てくるわけじゃないですか。でもその辺にはまったく関わっていない音ですよ。**

高橋:関わってないですね。もちろん 聴いてたし、様式美的なものもすんなり入ってきます。でも自分達が出す音っていうのはそれとはまったく違う音なんです。

**Q. バンドって「こういう音のバンド」っていうのと「こういう世界を持ったバンド」っていうと思うんですが SABBREBELLS は後者ですよ。ま**

**ったく何メタルって言えないし説明できない。**

高橋:そうだね。後者だね。それでまったく何メタルって言えない。それは無理だね。苦肉の策でドラマティックメタルとかって言ってたけど(レコード会社がつけたらしい)、言い表せない。俺はもともと何々メタルやろうぜって言ったことがないし。“ルルドの泉”なんて演歌ですよねなんて言われて。(笑)。

#### “ルルドの泉”の世界

**Q. “ルルドの泉”のイメージはどこから出てくるんですか？**

高橋:あれはねルルドの泉の話を知ったんですよ。そこに少女がいて、まあキリスト教の話ですね。俺はキリスト教は一つの会社だと思ってるんで、資本主義の中では宗教ってものは一つの会社組織として成り立たないと成立しないと思ってるんですよ。宗教を広めるためには戦争もやるっていう。で、その少女はルルドの泉の水を使えば病が治るって聞いて差し出してるっていう話で。その世界ではルルドの泉の水はマジックなんですよ。見えない目が見えたりするっていうね。今それがあつたらどうなのかってヒロちゃんに聞いたら「瓶詰めで売られるね、ただしえらく高いと思う、やっぱりどんな素晴らしいものでも、そんな伝説でも結局お金になっちゃうじゃない。それって悲しいよね」っていうのが“ルルドの泉”の悲しさなの。伝説ですら、どんなにキレイな話でもすべてはお金儲けに繋がらなければ成り立たないんだね、悲しいよね。だから話としては神秘的なものかもしれないけど、それがキリスト教の話だって言われなければただの美しい話なんだろうけどね。

**Q. 結局そんな素晴らしいイメージの世界も SABBREBELLS の中ではどこか現実と背中合わせになってますよね。**

高橋:そうなんです。それを聴いた人が感じ取れなくてもイイんです。ほんとに聖書を持って俺たちのライブに来て「悪魔の音楽反対」なんていう聖書突きつけられたことも何回もあるし。黒ミサなんていう黒魔術の団体がやってきて入ってくれなんて言ってきたこともあるマジで随分歌詞を深く聴いてくれるなって思いましたね。うれしかったね。ライブ終わっても女の子とかは全然来なくて「詞について質問したいんです」なんて人がよく来ましたね(笑)。

**Q. 詞についてのこだわりはものすごいものを感じましたね。**

高橋:詞はね、一生懸命考えたことじゃないと歌えないっていうのがあるんですよ。自分がホントに感じてることじゃないと歌えないっていうのがあったから。

例えばね、この地球に残されてるのは俺たちだけで周りが異国からきた宇宙人だらけで、俺たちは古い建物の前に追い詰められてもはや絶対絶命のような状態、そこで俺たちが手にした武器がギターだったリドラムだったりする、そこで演奏始めるとその宇宙人がキッズに変わっていく、っていうのが“Last Survivor”最期の生き残り。「どう？わかる？ SFX みたいじゃない？これって宇宙が出てくるから新しいイメージでやろうよ」っていうライトハンドのツインのハモをやってもらった。あそこを宇宙への信号としよう。っていうので曲が決まるんだ。それが曲の作り方。まあその部分がお客さんに伝わるかどうかってことよりもまず自分たちが在りきなんです。それがイメージ通りにできるとしてやったりっていう感じなんです。すごく自分のやりたいことがメンバーに伝わってメンバーもその気になるっていうのが大事なんですよ。もうそれはね、こんな感じ。「いい？好きな絵、イメージ言うよ。まずすごい今にも降り出しそうな雲、場所は丘の上、風がびゅうびゅう吹いて草が全部寝ちゃってる、その先に枯れた木がある。その木は黒。それが「Black Hill」。」そういう感じで作るわけ。だから作り方としては「どうこのリフ？」とかっていうのがあまりない。

**Q. なるほど。高橋さん、小説とか書けるんじゃないですか？**

高橋:いや、そこまでは出来ないと思うけど、ただ自分としては画面とか色だとかそういうものにはまりやすいんですよ。例えば山とか見ても「キレイだなあ」とか思ってもどこかで「これってホントにキレイなのか？」って疑ってる。「わかった、この山キレイだけどみんな杉の木だよ。人間が造った山だよ」じゃあそうじゃない山に行ってみよう。で、原生林に山に行くわけですよ。そこはキレイですよ。その木の絡み具合のセクシーさ、なにかから何まで自然なままなんです。人間なんか作り出せるもんじゃなくなっていく。そんな風に深く考えすぎちゃうんですよ。

**Q. 高橋喜ってヴォーカリストというよりストーリーテラー であると感**

**じてましたね。**  
高橋:でもそれは素晴らしいメンバーに恵まれてたからですよ。同じセッションでいい反応を貰えて、それを創れたからですよ。

## SABBRABELLS の終焉～第 2 期 SABBRABELLS

**Q. では、松川さんが結成した EMOTION とかを高橋さんはどう思っていました？**

高橋:まあ、上手くやってくれよって感じてた。俺のほうは半分音楽から離れて他のことをやってみたくて思ってたし。

**Q. その辺りのオリジナルメンバーでの最期の辺りってのはどんな感じだったんですか？**

高橋:結局、一言で始まったんですよ、解散ってのが。ヒロちゃんが俺に「キーチ、最近俺 STONES にイカしてる。5万円くらい使っちゃった。完璧にイカしてるよ。もうただの小僧だよ」って言って SABBRABELLS のステージなのにテレキャス持ってロングハット被ってジープンで出てくるし。一体どうしたんだよって感じて。そんなに長くやってきて、束縛もされずにやってきて次にやりたい事ができてそれが今と違えば仕方ない。松川君も宮尾君もそれぞれやりたい事がある。じゃあその方向に進んだ方がいいだろう。今やってる音に違うな、もうちょっと違う音を出したいなって思って、でも今の楽曲上それが無理なら俺はレコード会社の人と話すしかないなって。それぞれみんなアマチュア時代7年間それからデビューして3年くらいかな、やってきてみんなそれぞれにやりたい音でできてきたし、なら解散してそれぞれの道にいったほうがいいって思って解散を決意した。

**Q. 気持ち中ではサブラベルズの再結成ってして欲しくないんですよ。やはりあの時代にあの空気の中で完結した世界であつたと思うんです。**

高橋:実は一度だけオリジナルメンバーで音出したことあるんですよ。後期の SABBRABELLS (一度解散した後) は毎週川口モンスターってライブハウスでやらせてもらっているんなバンドとやりましたよ。かまいたち、AURA、ジャガーなんかともやった。とにかく SABBRABELLS が見たければ毎週金曜日あそこ行けば見れるって感じだった。何年間やったけな、3~4年やったかもしれないな。後期の SABBRABELLS ってけっこう長いんですよ。もう人気ないからあんまりみんな見に来ないけどけっこう長くやってたんですよ。(オリジナルの SABBRABELLS が) 終わってから5年はやってるんですよ。

**Q. 90年代にはいつからもうずいぶんやってたことになるんですね。**

高橋:そうですね。けっこう長かったですよ。で、その時に途中でだったかよく覚えてないけど昔のメンバー集まってやってみようという話になってスタジオ入って「束縛」をやりました。もう完璧大人の音になってた。ギターも松川君はバリバリのブルース、ヒロちゃんなんかもテレキャスターなんだから。それでいいなあって思ったのはみんな昔とかわかってない。機械じゃなくて身体で鳴らす音。そういう感じが出てよかったなあ。ある種原点に帰ってみたい感じが。

**Q. 昔の SABBRABELLS の曲を今再び演奏するというのは考えられないということですね。**

高橋:考えられないですね。SABBRABELLS 一止めて、レコード会社もやめて俺は歌舞伎町でまたストリートに戻って指輪売ったりしてたんですよ。後期の SABBRABELLS はもう半分死んでた俺を新しいメンバーが「キーチ何やってるんだ、また SABBRABELLS やらなきゃダメだ、このままじゃ死んじゃうぞ」って言って何度も来たんですよ。3回目に来たとき自分の白いフライング V に「SABBRABELLS」って描いてあってそれを歌舞伎町の歩道で弾くんですよ。それでメンバーも揃ってるといって俺も思い腰を上げて始めました。俺が作ったのは「Iron Road」って曲なんですけど、これは鋼鉄背負って砂の上を歩き続けるっていう非常に好きな曲です。それと「嵐の前に」っていうのと、あと「Running Hell」ってのもありましたね。確かにドラムのリズムが不安定だったりいろんなところで前の SABBRABELLS に比べればコテンパンに言われた、でもツアーもやってそこには必ず新しいファンが生まれた。俺にすれば死にかけた俺を救ってくれたというような意識があったんで、こいつらとだったら思いっきりやれるっていう気持ちがありましたね。勿論前のメンバーとも仲いいですけど。「俺たちすげーイバンドだぜ」って俺が自分で言うくらいだったんだから。でもそのギタリストは3年前34歳の若さで世界してしまったんですよ。さすがにそれは俺もショックでしたね。胸にピック抱いて逝ってしまった時には本当に涙でしたから。もう世界してしまう人の出てくる世代になって本当に言いたい事、心の底から訴えたい事ってのが昔とは変わってると思うんですよ。俺がもう一度やるんだしたら本当にそういう詞を自分で書いて、それをわかってくれるメンバーがいて、じゃあ演ろうかって、それが俺の集大成、答えなんですよ。そういう形であればまたやれるんです。「へ

ヴィメタルは最近再結成ブームで、じゃあまた SABBRABELLS もやろうかって、みんな太ったね」なんてのはカッコよくもおもしろくもなともないんですよ。じゃあ ANTHEM とかはどうしてカッコいいかという柴田さんはずーっと最前線で戦ってる、それを継続できてるからイイんですよ。俺みたいに1回抜けて別の世界に行ってるというんなら詞が出てきますよ。それをいつか録音しておきたいなんて気持ちもどっかにあるんですよ。

**Q. では SABBRABELLS の再結成なんて話は有り得ないという事ですね？**

高橋:そうですね。昨日宮尾君とも話したけどもし俺たちがまた SABBRABELLS をやるならあの時のあのテンションを超えなきゃだよなって。宮尾君は「俺はどんな Bass が一番カッコいいかわかってる。でもおれはそれが出来ない。一番の理想の形にならないならステージには立てない」って言ってました。でも俺もそうですね。ステージに立ってマジックがでるような、インパクトが出るようなものじゃなきゃいやだ。ただ懐かしいなんてのではやらない方がまし。それはそれで昔のまんまフィルムに収めてもらって、もしまたやるんだしたら別のフィルムいれて見て欲しい。

**Q. ただの再結成ってして欲しくないですね。**

高橋:そう、そんなのでやったら曲が死んじゃうんですよ。入り込めないと歌えない曲ばかりなんで。一人だけ入り込んでてもしょうがないです。今の世の中に、今の俺が人生に何か回答を出してるか、何の見返りも求めずに本気で作った詞でそれを歌えるかっていうヤツでやりたい。でもそれが必ずしも SABBRABELLS になるかっていうとみんな違うと思うんだよ。

今は BAD COMPANY なんかもまたよく聴くんだけど、原点に戻るっていかああの歌の中のちょっとしたドラマの世界にはまったのが原点なのでまた歌うとしたらそんなものになるかなあって思うけどね。FREE とかも、もちろん DEEP PURPLE も好きだけどそこまでライオンじゃない。あの Paul Rodgers のようなさり気ない、あの何とも言えないギミックのない世界に憧れちゃうなあ。

今やってる仕事は全然違うんだけどね。でも今でもなんか心臓がドキドキっていうようなものと付き合っていないと嫌だと思ってますよ。今はまた別の世界でそんな思いをします。それがなくなっちゃったらなんか急に歳とっちゃうでしょうね(笑)。

**Q. 今日長い間本当にありがとうございました。**

## インタビューを終えて

楽曲の中の歌詞世界についてもとても興味深い話を聞かせてもらえた。やはり高橋喜一はストーリーテラーだと思う。話を聞いていても非常に表現が巧みで引き込まれるものがある。私はもうインタビュアーではなくただ彼のモノローグを聞いているだけの状態になっていた。自分が表現する、伝えるということにとっても真剣で繊細な感じがあった。それは残された楽曲の中にも十分感じとる事ができると思う。その歌詞世界に注目して彼等の作品を聴いてみるとまた新しい発見があると思う。

このインタビューの中には、もしあなたがバンドをやっていたらとても参考になる発言がたくさんあると思う。すでに音楽から退いてまったく別の仕事をしている彼のところにもテープを聞いて欲しいというバンドが来ることもあるという。今回わざわざ時間をとっていただいたが、すでに音楽活動を何もしてない高橋さんにとっては我々のこのインタビューにお付き合いいただいても何のメリットもないはずである。でも彼はわざわざやって来てくれて3時間にもわたっているんなことを話してくれた。ただ純粋にロックのことを語ってくれた。それは今の時代のバンドに対してのメッセージでもあったと思うし、今メタルを好きで本誌を読んでいる人々へのメッセージでもあると思う。「もしこれが大きな商業誌からの依頼だったら受けなかったですよ」と言ってくれたのは本当に嬉しかった。